

鏡の檻

目次

第1話：侵入と捕獲	2
第2話：支配の確立	16
第3話：関係の変化	28
第4話：深化と葛藤	38
第5話：救出と選択	49
あとがき	60

第1話：侵入と捕獲

廃遊園地の夜は静寂に支配されていた。月明かりが錆びついた観覧車の骨組みを照らし、風が朽ちたメリーゴーランドの馬たちを軋ませている。拓真は懐中電灯の光を頼りに、瓦礫と雑草に覆われた園内を進んでいった。

心臓が高鳴っている。家族には「夜勤の警備」と嘘をついてここに来ていた。本当は廃墟探索が目的だった。SNSで話題になっているこの場所の、特に「鏡の迷宮」の写真を撮りたかった。フォロワーたちの反応を想像すると、唾液が口の中に湧いてくる。

施設の奥で、ひときわ異様な建物を見つけた。「ミラーワールド」と書かれた看板が傾いている。入口のドアは半開きで、内部からかすかに光が漏れていた。

「誰かいるのか？」

拓真の声が夜の静寂を破った。警戒しながら足を進める。ドアを押し開けると、無数の鏡が迎えた。天井から床まで、四方八方が鏡で覆われている。懐中電灯の光が乱反射し、自分の姿が無限に映し出された。

足音が響く。自分のものではない。血液が急速に頭部に集中し、視界の端がぼやけた。

「誰だ！」

振り返った瞬間、強い腕が拓真の体を掴んだ。懐中電灯が床に転がり、光が踊る。筋肉の盛り上がりが背中を通じて伝わってくる。

「侵入者だな」

低い声が耳元で響いた。拓真より少し背の高い男が、後ろから拓真の体を押さえつけている。腕の血管が浮き出るほどの力で胸に回され、肋骨が圧迫される。

「離せ！何者だ！」

「俺は圭介。ここの管理者だ」

男は拓真の手首を背中に回し、何かで縛り上げた。プラスチック製の結束バンドだった。手首に食い込む圧迫感で、指先の血流が阻害される。

「管理者って、ここは廃墟だろ！」

「そうだ。だから侵入者は処罰する」

圭介は拓真を鏡の前に押し付けた。冷たいガラスが頬に触れ、体表温度との差で全身に鳥肌が立つ。鏡の中で、自分の眉間に刻まれた困惑の皺と、背後で口角を上げる圭介の顔が映っている。

「処罰って何だよ！警察を呼ぶぞ！」

「ここには電波は届かない。それに、お前が不法侵入したんだ」

圭介の手が拓真のポケットを探った。スマートフォンを取り出し、床に叩きつける。画面が蜘蛛の巣状に割れて光が消えた。プラスチックの破片が床に散らばる音が響く。

「くそ！」

拓真は暴れたが、結束バンドが手首に食い込んで痛い。皮膚が擦れる感覚が神経を刺激する。圭介は拓真の肩を掴み、迷宮の奥へと

引きずっていく。革靴の底が床を擦る音が反響し、鏡の廊下を進むたび、無数の自分たちの姿が追いかけてくる。

「ここがお前の部屋だ」

円形の小部屋に着いた。ここも四方が鏡で、天井にも鏡が張られている。床にマットレスが一枚置かれているだけの簡素な空間だった。空気はかび臭く、湿度が高い。

「何のつもりだ！」

「お前を監視する。逃げようとしても無駄だ。この迷宮から出口を見つけるのは不可能だからな」

圭介は壁際に置かれた椅子に座り、拓真を見つめた。鏡のせいで、圭介の姿も無数に反射している。どこを見ても圭介の視線から逃れられない。拓真の首筋に汗が滲み出る。

「なんで俺を捕まえた？金が目的か？」

「金には興味がない」

「じゃあ何が目的なんだよ！」

圭介は立ち上がり、拓真に近づいた。拓真は後ずさりしたが、背中が冷たい鏡にぶつかる。

「お前が面白そうだからだ」

圭介の指が拓真の顎を持ち上げた。至近距離で見つめ合う。圭介の瞳は深い茶色で、虹彩の周縁部がわずかに金色に光っている。瞳孔が微細に拡張し、何かを見透かすような光を宿していた。

「面白そうって、何だよ…」

「お前、家族に何て言ってここに来た？」

拓真の表情が固まった。喉が急に乾き、唾液の分泌が止まる。

「警備の仕事だと嘘をついたんだろ？」

「なんで知ってる…」

「お前みたいな奴を見てきたからな。嘘をついてまで危険な場所に来る。家族を騙してまで刺激を求める」

圭介の手が拓真の頬を撫でた。皮膚の表面を指先が滑る感覚に、拓真の筋肉が緊張した。

「俺と同じだ」

「同じって…」

「俺も最初は侵入者だった。でも今はここが家だ。お前もそうなるかもしれない」

圭介の指が拓真のシャツの襟元に触れた。

「今夜はゆっくり休め。明日から本格的に始まる」

「何を始めるって…」

「お前の教育だ」

圭介の手がシャツのボタンに触れた。拓真は身を強張らせたが、逃げることはできない。

「でも、少しだけ味見させてもらう」

圭介は拓真のシャツの上のボタンを外した。胸元が僅かに露わになる。

「やめろ...」

「やめてほしいのか？」

圭介の手がシャツの中に滑り込んだ。温かい掌が直接肌に触れると、拓真の体がびくんと跳ねた。

「あっ...」

「敏感だな」

圭介の指が拓真の乳首を見つけた。軽く撫でるだけで、拓真の呼吸が乱れる。

「やめ...んっ...」

「体は正直だな。もう硬くなってる」

確かに拓真の乳首は血管が拡張し、硬く立っていた。圭介の指が円を描くように愛撫すると、電流のような刺激が脊髄を駆け抜ける。

「下半身も反応してるじゃないか」

圭介の視線が拓真の股間に向けられた。ジーンズの前面が微かに膨らみ始めている。

「違う...これは...」

「何だ？説明してみろ」

圭介の手が拓真のベルトに触れた。金属のバックルが指先に触れる音がかすかに響く。

「まだ何もしていないのに、もうこんなに興奮して」

圭介はベルトを外し、ジーンズのボタンとファスナーを下ろした。下着越しでも、拓真の勃起がはっきりとわかる。

「立派なサイズじゃないか」

圭介の手が下着の上から拓真の男性器を握った。拓真の体が電流のように震えた。

「あっ...やめて...」

「やめてほしいのに、こんなに硬くなるのか？」

圭介は下着を下ろし、拓真の男性器を露わにした。勃起状態で約18センチ、太さも申し分ない。先端からは既に透明な液体が滲み出ている。

「美しいな」

圭介は拓真の男性器を握り、ゆっくりと上下に動かした。自分以外の手で愛撫されるのは初めてで、拓真は混乱した。

「んっ...ああっ...」

圭介の手の動きは的確で、拓真の敏感な部分を正確に刺激していく。

「気持ちいいだろう？」

「気持ちよく...ない...」

「嘘をつくな。もう先走り液がこんなに出てる」

確かに拓真の男性器からは大量の先走り液が分泌され、圭介の手のひらを濡らしていた。

「このまま出してやろうか？」

「だめ...まだ...」

「まだ何だ？」

圭介の手の動きが早くなった。拓真はもう堪えることができなかった。

「ああっ...出る...出る...」

拓真の男性器から勢いよく精液が噴出した。圭介の手に、自分の腹に、そして床に白い液体が飛び散った。射精の勢いは強く、複数回に渡って脈動した。

「すごい量だな」

圭介は精液で濡れた手を拓真に見せた。

「味見してもいいか？」

圭介は指先についた精液を舌で舐めた。その光景に、拓真は新たな衝撃を受けた。

「少し塩辛いが、悪くない味だ」

圭介は拓真の男性器を再び握った。まだ敏感な状態で、拓真は腰を引いた。

「逃げるな。まだ終わってない」

圭介は拓真の脚を広げ、その間に膝をついた。そして口を近づけた。

「何を…」

「掃除してやる」

圭介の舌が拓真の男性器を舐めた。射精直後の敏感な状態で、拓真は悶絶した。

「あああっ…だめ…敏感すぎる…」

圭介は容赦なく舌を動かし、残った精液を舐め取っていく。亀頭の溝も丁寧に舐められ、拓真は快感で意識が朦朧とした。

「今度は俺の番だ」

圭介は立ち上がり、自分のズボンを下ろした。現れた男性器は拓真のものより一回り大きく、血管が浮き出ている。約20センチはありそうな立派なサイズだった。

「舐めろ」

「無理です…」

「舐めないと、お前をここから出してやらない」

拓真は仕方なく膝をついた。圭介の男性器が目の前にある。独特の匂いがした。

「まずは舐めてみろ」

拓真は恐る恐る舌を出し、先端に触れた。微かに塩味がした。

「そのまま続けろ」

拓真は言われた通りに舌を動かした。圭介の男性器は熱く、脈打っていた。

「今度は口に含め」

「できません…」

「やれ」

圭介は拓真の頭を掴み、強制的に口に押し込んだ。拓真は咳き込みそうになったが、圭介は構わず腰を動かした。

「んっ…がっ…」

拓真の口の中で圭介の男性器が動く。唾液が大量に分泌され、口の端から垂れ落ちた。

「上手だ。そのまま続けろ」

圭介の腰の動きが激しくなった。拓真は息苦しかったが、必死に耐えた。

「もうすぐだ...全部飲め」

圭介の男性器が拓真の口の中で脈動し、大量の精液が流れ込んできた。拓真は驚いたが、圭介に頭を押さえられているため飲み込むしかなかった。

「よくできた」

圭介は満足そうに拓真を見下ろした。

「でも今夜はまだ終わらない」

圭介は拓真を仰向けに倒し、脚を広げた。

「何を...」

「お前の後ろも開発してやる」

圭介の指が拓真の臀部に触れた。

「やめて...そこは...」

「嫌がるな。気持ちよくしてやる」

圭介は指に唾液をつけ、拓真の肛門に触れた。

「あっ...」

指先が肛門を撫でると、拓真の体が震えた。

「力を抜け」

圭介の指が徐々に中に入ってきた。拓真は痛みと違和感で体を強張らせた。

「痛い…」

「最初は痛いけど、すぐに慣れる」

圭介は指を前後に動かし、拓真の内部を拡張していく。やがて二本目の指も入れた。

「んっ…あぁっ…」

痛みが徐々に別の感覚に変わってきた。圭介の指が奥の一点を擦ると、今まで感じたことのない快感が走った。

「そこがお前の急所だ」

圭介は前立腺を集中的に刺激した。拓真の男性器が再び硬くなってきた。

「もう入れても大丈夫だな」

圭介は自分の男性器を拓真の肛門に当てた。

「待って…無理です…大きすぎる…」

「大丈夫だ。お前なら受け入れられる」

圭介はゆっくりと腰を押し込んだ。拓真の肛門が徐々に広がっていく。

「あああぁっ…痛い…裂ける…」

「力を抜け。息を吐いて」

圭介の男性器が拓真の内部に侵入していく。痛みで涙が出てきた。

「半分入った」

圭介は一度止まり、拓真の体が慣れるのを待った。

「動くぞ」

圭介は腰をゆっくりと前後に動かした。最初は痛みだけだったが、徐々に快感が混じってきた。

「あっ...あっ...なんで...気持ちいい...」

「言ったろう。すぐに慣れるって」

圭介の動きが激しくなった。拓真の前立腺を正確に突いてくる。

「ああっ...そこ...そこがいい...」

拓真は自分でも信じられない言葉を口にしていた。

「お前も動け」

「どうやって...」

「腰を振るんだ」

拓真は言われた通りに腰を動かした。圭介の男性器がより深く入ってくる。

「そうだ。いい動きだ」

二人は激しく腰を動かし合った。部屋には肉体が衝突する音と、二人の荒い息遣いが響いた。

「もうすぐイク...」

圭介の動きがさらに激しくなった。拓真も限界に近づいていた。

「一緒にイクぞ」

「ああっ...ああっ...イク...イクッ...」

拓真は手を使わずに射精した。同時に圭介も拓真の体内に大量の精液を放出した。

二人は激しく痙攣し、しばらく動けなかった。

「どうだった？」

圭介が拓真に問いかけた。

「わからない...でも...」

「でも？」

「気持ちよかった...」

拓真の正直な答えに、圭介は満足そうに微笑んだ。

「これからもっと気持ちよくしてやる」

圭介は拓真から離れ、立ち上がった。拓真の肛門からは圭介の精液が溢れ出ていた。

「今夜はここまでだ。明日からが本格的な教育だ」

圭介は服を着て部屋を出ていった。拓真は一人残され、今起こったことが現実なのかわからなくなっていた。

鏡に映る自分を見た。全身汗まみれで、精液にまみれた姿があった。そして何より、満足そうな表情を浮かべている自分がいた。

「俺は...何をしてるんだ...」

だが体は既に圭介の快楽を記憶していた。明日、また圭介に抱かれることを、密かに期待している自分がいた。